



理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究

著者	城戸 淳
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第284号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59990

本論文はイマヌエル・カント著『純粹理性批判』（1781年／87年）の超越論的弁証論について、その生成過程を發展史的に跡づけるとともに、その三つの特殊形而上学批判（誤謬推理論、アンチノミー論、理想論）における理性の深淵の諸相を探るものである。超越論的弁証論によれば、理性は魂、世界、神という三つの無制約者によってわれわれの認識と存在の全体に究極的な根拠を与えようとするが、その試みはことごとく破綻する。そこで理性はみずから作りだした仮象に縋りついて欺瞞的に無制約者を措定して、基礎づけを果たす。カントの理性批判はこの理性の自己欺瞞を暴くものであって、これによって理性は無根拠性を露呈し、みずからを深淵へと曝してしまうのである。そして、このような基礎づけの危機をへて、理性は感性論と分析論における経験の積極的な構築へと転回することになる。「理性の深淵」という本論文のタイトルは、魂、世界、神という形而上学の無制約的な領域で人間理性が避けがたく陥る無根拠性の危機と、その「深き淵より」みずからを救う理性の自律的な根拠づけの試みのことを表わしている。

本論文は第Ⅰ部の發展史的な研究と第Ⅱ部から第Ⅳ部の各論的な研究に二分される。第Ⅰ部では、1770年の『就職論文』から1781年の『純粹理性批判』にいたる發展史に着目し、カントがいかにして超越論的弁証論の概念と構想を獲得したのかを追跡した。第Ⅱ～Ⅳ部は、超越論的弁証論における三つの特殊形而上学に対する批判について、とりわけそこに流れ込んださまざまな哲学史的な文脈に留意しつつ、各論的に解明を試みた。

第Ⅰ部は「超越論的弁証論の生成」を課題とする。第1章「「取り違い」概念の展開——發展史の一断面」では、『就職論文』で方法論的な鍵概念として採用された「取り違い（Subreption）」が、『純粹理性批判』の超越論的観念論や理性批判に向けていかに展開したのかを跡づけた。第2章「弁証論と理性——沈黙の十年間」では、1770年代の〈沈黙の十年間〉における批判哲学の問題設定と、超越論的弁証論の形成過程を發展史的に辿り、この過程のなかで「原理の能力」としての「理性」の概念が確立したことを明らかにした。

第Ⅱ部の三つの章は「誤謬推理論」をあつかう。第3章「理性批判と自己意識——誤謬推理論の改稿の背景」では、カントの合理的心理学批判の骨格を辿り、さらに第二版における誤謬推理論の改稿の背景として、自己認識をめぐる理性批判の深化と、演繹論における新たな自己意識論があったことを見とどけた。第4章「人格と時間——第三誤謬推理のコンテクスト」では、人格の同一性をめぐる第三誤謬推理を、人格や不死性をめぐるロックやライプニッツ以来の思想史や、感性論の時間論や観念論論駁などのカント哲学の概念装置のなかに位置づけて解釈することを課題とした。第5章「カントの *Cogito ergo sum* 解釈」は、カントがいかにもみずからの自己意識論の変遷と並行しつつコギト命題を解釈したかを跡づけて、第二版の誤謬推理論で展開される、「私はある」は経験的命題だとする議論を読み解くことを試みた。

第Ⅲ部は「アンチノミー論」を主題とする三章を収める。第6章「流れさった無限と世界の起源——第一アンチノミー」では、世界の空間・時間的な量をめぐる第一アンチノミーの定立・反定立の証明の論理について、無限と宇宙の起源・限界をめぐる西洋思想史をふまえて解明を試みつつ、超越論的観念論による批判的解決までを跡づけた。第7章「無限と崇高」は、「無限」を軸として、前批判期の思索から第一アンチノミーにおける「無限性の超越論的概念」、その解決における「無際限への遡源」へと辿り、『判断力批判』の崇高論を構想力の無限論として読解した。第8章「人間的自由の宇宙論の本質について——第三アンチノミー」では、いわゆる二性格説的な解決の難点を解消するために、第三アンチノミーの宇宙論的＝神学的な背景をふまえて再構成しつつ、さらに超越論的観念論を人間的自由の実践的パースペクティブの構造として解釈することを試みた。

第Ⅳ部は「理想論」をテーマに、第9章「存在の深淵へ——神の現存在の宇宙論的証明」の一章からなる。この章では、宇宙論的証明における理性の弁証論的な転回を見とどけたあと、存在論的ユートピアが破綻して「人間理性にとっての真の深淵」が開かれる場面に迫り、超越論的観念論の新たな様相論を展望した。

補章「理性と普遍性——カントにおける道德の根拠をめぐって」は、『純粹理性批判』の超越論的弁証論に跡づけた「理性の深淵」のモチーフを、カント倫理学における道德的理性の構造にも見とどけることによって、本論文の解釈の射程の一端を示したものである。

提 出 者	城戸 淳
論文審査担当者	(主査) 教授 座小田 豊 教授 戸島 貴代志 准教授 直江 清隆
論 文 名	理性の深淵——カント超越論的弁証論の研究
<p>本論文は、カントの主著『純粹理性批判』(以下『批判』と略す)の「超越論的弁証論」について、その生成過程を発展史的に跡づけると共に、「理性の深淵」の意味の論点分析的解明という観点から総合的に読解した優れた業績である。論者は、カントが従来の形而上学によって議論されてきた魂、世界、神という主題に潜む理性の自己欺瞞的陥穽を克服しようとして自らが無根拠の「深淵」に曝され、それに耐えうる理論構築に腐心していった経緯を精密に論証し、超越論的弁証論研究に新解釈を提示している。</p> <p>論者はまず第Ⅰ部「超越論的弁証論の生成」において、「取り違え」概念の帰趨に着目し前批判期カント哲学の発展史の一断面を鮮やかに切り出している。カント研究史のなかでもほとんど注目されてこなかった、「知性的概念と感性的概念の混淆」であるこの概念の奥行きと広がり解釈することによってカントの言う「超越論的取り違え」の積極的な意義が明らかにされる。さらに、『批判』までのいわゆる「沈黙の十年」において超越論的弁証論の三つの章をなす「誤謬推理論」、「アンチノミー論」そして「理想論」が形づくられるにいたるそのプロセスが詳らかにされるのである。</p> <p>続く第Ⅱ部「誤謬推理論」においては、まず『批判』の第1版と第2版の改稿の意味内容が精査され、自己意識の「迷宮」をめぐる議論を丹念に追究し、論者はそこに「理性の自己認識をめぐる理性批判の深化」の営みを読み解き、「統覚の分析的統一はその総合的統一を前提する」というテーゼを導出する。次いで、魂の人格性を議論する「第三誤謬推理」を題材に、〈私〉という統制的理念と「経験」との裂かれた両極間の振幅を生きたところにこそ人格の同一性が確保されるのだと結論づける。さらに、近代哲学における「コギト」(われ思う)の系譜をつぶさに辿り、カントにおいて「自己意識の総合モデル」が獲得されていく経緯が明らかにされる。</p> <p>さらにⅢ部「アンチノミー論」では、「宇宙に始まりが存在するか否か」の第一と、「自由な原因は存在するか否か」の第三のアンチノミーが取り上げられ、前者においては「無制約的な起源」と無限の問題が、後者においては永遠と時間、自由と必然性の問題が論じられ、人間主体の超越論的自由の可能性が浮き彫りにされる。なお、両者の間に『判断力批判』における「無限と崇高」解明が置かれ、論証に厚みと深みを与えている。</p> <p>最後の第Ⅳ部「理想論」においては、「神の現存在の宇宙論的証明」が取り上げられ、カントがこの宇宙論的証明を退ける理由が明らかにされる。すなわち宇宙論的証明は絶対的必然者としての神を「実存在の総体」という「汎通的規定」として前提しており、この「捏造された最実在者 <i>ens realissimum</i>」から「現存在」を導出している、というのである。論者は、これを「存在論的ユートピアの夢」と規定し、カントが人間理性に残さざるをえなかった問い、「私は一体どこから来たのか」という独語がこだまするところに「存在の深淵」を見て取るのである。</p> <p>最後に補論が置かれているが、これは本論文と、やがて行われるであろう『実践理性批判』と『判断力批判』研究との橋渡しを意図した意欲的な構想を示したものである。</p> <p>以上の考察はカント研究に新たな視座を提供するものである。論の構成も精密で、内外の先行研究への目配りも十分に行き届いており、さらには、カントが依拠したであろう様々な文献にも可能な限り目を通すという周到な配慮が認められる。今後のカント研究の範となりうる好論文であると評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	